

華山の人物画と江戸文人画の花鳥

特別展示室

期間: 令和2年3月28日(土)~5月31日(日)

1	わたなべ かざん 渡辺華山	ちつぱいりくいつ 竹溪六逸		江戸時代後期	紙本淡彩	掛幅	椿椿山旧蔵
2	わたなべ かざん 渡辺華山	かんていぞう 関帝像		文化9年(1812)	紙本淡彩	掛幅	
3	わたなべ かざん 渡辺華山	かんうぞう かくせい 関羽像 複製		文化11年(1814)	紙本淡彩	掛幅	
4	わたなべ かざん 渡辺華山	あきくしやうきんず 秋草小禽図		文政元年(1818)	絹本着色	掛幅	
5	わたなべ かざん 渡辺華山	とうりえんやゆうず 桃梨園夜遊図		天保2年(1831)	紙本淡彩	掛幅	
6	わたなべしやざん 渡辺如山	ざくろしやくやくはくとう 柘榴芍薬白頭		天保2年(1831)	紙本淡彩	掛幅	
7	つばき ちんざん 椿 椿山	しゅうこうさんすいず 秋江山水図		江戸時代後期	紙本淡彩	掛幅	
8	わたなべしやざん 渡辺如山	ばい ちちやうしゆんず 梅華長春図		江戸時代後期	絹本着色	掛幅	明治9年小華賛
9	わたなべしやざん 渡辺如山	しやくやくの ず 芍薬之図		天保6年(1835)	絹本着色	掛幅	
10	わたなべしやざん 渡辺如山	りゅうとうひやくちゆうず 柳亭百虫図		江戸時代後期	紙本淡彩	掛幅	
11	おかもとしゆうき 岡本秋暉	かちやう りゆうず 花鳥・龍図	三幅	江戸時代後期	紙本淡彩	掛幅	
12	おかもとしゆうき 岡本秋暉	きじやくず 喜鵲図		安政元年(1854)	絹本着色	掛幅	
13	おかもとしゆうき 岡本秋暉	ふよう えんおう ず 芙蓉鴛鴦図		江戸時代後期	紙本淡彩	掛幅	
14	やまもときんこく 山本栞谷	さいかんせんびんず 歳寒仙品図		天保13年(1842)	絹本着色	掛幅	
15	つばき ちんざん 椿 椿山	かんこうず 寒香図		嘉永3年(1850)	絹本淡彩	掛幅	
16	つばき ちんざん 椿 椿山	ぼたん ず 牡丹図		嘉永3年(1850)	紙本淡彩	掛幅	
17	つばき か かく 椿 華谷	こ ずい ず 五瑞図		天保13年(1842)	紙本淡彩	掛幅	贈福田半香
18	つばき ちんざん つばき か かく 椿 椿山 椿 華谷 おだ ほせん 小田莆川	こ ずい ず 五瑞図		天保12年(1841)	絹本着色	掛幅	
19	わたなべしやうか 渡辺小華	きゅうせいず 九清図		明治10年(1875)	絹本着色	掛幅	
20	わたなべしやうか 渡辺小華	りゅうこうひえんず 柳香飛燕図		明治17年(1884)	絹本着色	掛幅	
21	つばき ちんざん 椿 椿山	そしつせんしゆんず 素質先春図		弘化3年(1846)	紙本淡彩	掛幅	
22	わたなべしやうか 渡辺小華	かきんじゆにちよう 花禽十二帖		明治時代	絹本着色	画帖	
23	わたなべしやざん 渡辺如山	かき が かん 花卉画卷		文政12年(1829)	紙本淡彩	横巻	
24	わたなべしやざん 渡辺如山	しん う きやくざ ろく 辛卯客坐録		天保2年(1831)	紙本淡彩	冊子	個人蔵
25	わたなべしやざん 渡辺如山	うんえんかがん 雲煙過眼	丙申第二	天保7年(1836)	紙本淡彩	冊子	個人蔵
26	わたなべ かざん 渡辺華山	かおうまんろく 華翁漫録		江戸時代後期	紙本淡彩	冊子	個人蔵
27	わたなべ かざん 渡辺華山	かおうまんろく 華翁漫録		江戸時代後期	紙本淡彩	冊子	個人蔵
28	わたなべ かざん 渡辺華山	しん う こう 辛卯稿		天保2年(1831)	紙本淡彩	冊子	個人蔵
29	わたなべ かざん 渡辺華山	ぜんらくおうまんこう 全楽翁漫稿		天保4年(1833)	紙本淡彩	冊子	個人蔵
30	ふめい 不明	が じんぶつしよき かん 画人物諸式巻		江戸時代後期	紙本墨書	横巻	椿華谷旧蔵
31	つばき か かく 椿 華谷	か がんしゆくず 過眼縮図	第壹	天保6年(1835)	紙本淡彩	冊子	個人蔵
32	つばき か かく 椿 華谷	か がんしゆくず 過眼縮図	第貳	天保年間	紙本淡彩	冊子	個人蔵
33	つばき か かく 椿 華谷	か がんしゆくず 過眼縮図	第参	天保年間	紙本淡彩	冊子	個人蔵
34	つばき か かく 椿 華谷	かこくせんせいしゆくず 華谷先生縮図		天保7年(1836)	紙本淡彩	冊子	個人蔵
35	つばき か かく 椿 華谷	つばきしやうがろく 椿 彰画録		江戸時代後期	紙本淡彩	冊子	個人蔵
36	つばき か かく 椿 華谷	かこくせんせいこがしゆくず 華谷先生古画縮図		天保11年(1840)	紙本淡彩	冊子	個人蔵
37	つばき ちんざん 椿 椿山	たくかどうちんざんせんせい 琢華堂椿山先生画帖		江戸時代後期	紙本淡彩	冊子	
38	つばき ちんざん 椿 椿山	たくかどうちんざんせんせい 琢華堂先生写生冊子		江戸時代後期	紙本淡彩	冊子	個人蔵

● 渡辺華山 寛政5年(1793)～天保12年(1841)

江戸麴町田原藩上屋敷に生まれました。絵は金子金陵から谷文晁につき、伝統的な東洋画の画風に西洋的な陰影・遠近画法を加えた作品に評価が高い。40歳で藩の江戸家老となり、藩財政の立て直しを進めながら、江戸の蘭学研究の中心にいました。「蛮社の獄」で高野長英らと共に投獄され、在所蟄居となり天保12年に田原池ノ原で自刃しました。

● 椿椿山 享和元年(1801)～嘉永7年(1854)

江戸に生まれ、幕府槍組同心。華山が最も信頼した弟子です。長沼流兵学を修め、また俳諧、笙、煎茶への造詣も深い。水彩画を思わす色調の花鳥画及び華山譲りの肖像画を得意としました。

● 椿華谷 文政8年(1825)～嘉永3年(1850)

椿山の長男として生まれ、名を恒吉といいます。幼くして華山に入門し、華谷という号を与えられました。華山の友人で学者椿蓼村の娘を妻に迎え、一女をもうけました。椿山の画風を受け継ぐ清らかな色彩の花鳥画を得意とし、その才能を期待されましたが残念ながら椿山に先立ち、26歳で亡くなりました。

● 小田莆川 文化2年(1805)～弘化3年(1846)

旗本戸川氏の家臣で江戸牛込若宮新坂に住み、名は重暉、字は土顕、拙修亭とも号し、通称を清右衛門と称しました。画を華山に学び、椿山と同様に山水・花鳥を得意としましたが、現存する作品は少ない。華山が蛮社の獄で捕われると、椿山と共に救済運動に奔走しました。弘化3年7月5日、旅先の武蔵国熊谷宿で病没しました。田原市博物館には彼の手控画冊十冊が保管されています。

● 渡辺如山 文化13年(1816)～天保8年(1837)

如山は華山の末弟として江戸麴町に生まれました。名は定固(さだもと)、字は季保、通称は五郎、如山または華亭と号し、兄華山の期待に応え、学問も書画もすぐれ、将来を期待されましたが、22歳で早世しました。14歳から椿椿山(1801～1854)の画塾琢華堂に入門し、花鳥画には華山・椿山二人からの影響が見られます。文政4年(1821)華山29歳の時のスケッチ帳『辛巳画稿』には6歳の幼な顔の「五郎像」として有名です。

● 岡本秋暉 文化4年(1807)～文久2年(1862)

江戸生。名は隆仙、字は柏樹、通称は祐之丞、晩年は秋翁と号しました。小田原藩主大久保家に仕え、はじめ画を大西圭齋に学びました。渡辺華山の門人とされていましたが、椿椿山は日記の中で否定しています。沈南蘋など明清の画風にならった、写実的で精緻な表現を基調に装飾性が加味された花鳥画も得意としました。鳥の目、葉脈、樹木の表皮表現は彼独特の個性です。56才で没しました。

● 渡辺小華 天保6年(1835)～明治20年(1887)

小華は華山の二男として江戸麴町に生まれました。、弘化4年(1847)13歳の小華は田原から江戸に出て、椿椿山の画塾琢華堂に入門し、椿山の指導により、花鳥画の技法を習得しました。江戸在勤の長兄立が25歳で亡くなったため、渡辺家の家督を相続し、幕末の田原藩の家老職や、廃藩後は参事の要職を勤めました。花鳥画は椿山の画風を発展させ、には、特に水墨表現では独自の世界を築き、宮内庁(明治宮殿)に杉戸絵を残すなど、東三河や遠州の作家に大きな影響を与えたが、53歳で病没しました。